

ジャーナリストと名乗っている人が苦手、いや、嫌いでした

遠藤 麻由美 指導主事

ゆき様

私はこれまで ジャーナリズム、いやジャーナリストと名乗っている人が苦手、いや嫌いでした。それは、学校現場にいて様々な問題が起こった時の「新聞記者」の取材に対する姿勢が、大嫌いだったからです。

取材の前に、すでに「学校の対応が悪い」「教師が悪い、管理職が悪い」という先入観満載で訪れているからです。

事例によっては、そのような場合ももちろんあります。しかし、まず取材の際には、公正・公正な目で事実を明らかにし、そこから記事を作成するべきではないか、とずっと(いや、現在でも)考えています。

残念ながら、私の身近で関わった記者さんにはそのような人はいなかったのです。

しかし、今回の講義から、私が関わった方は、「本来のジャーナリストではなかったのだ！ニセモノだ！」と確信しました。これが今回の大きな学びの一つです。

精神病院での身体拘束、寝たきり老人問題、そして子宮頸がんワクチン問題など、ゆきさんたち真のジャーナリストが正しい取材を通して、そこに潜む真実や嘘、闇を明らかにしていく道筋は、ジャーナリズムの最終目的とする「社会を変える」活動に直結するものなのですね。

私たち国民が知ることが難しい社会問題を地道な活動を通して、読み解き、ほどこき、再構成して真実を明らかにしていく。感服しました。

ジャーナリズムは「ことばをつくり、ことばを退治して 社会を変える」

これにも力をいただきました。

「認知症治療」とか「患者」とか「徘徊」とかの言葉は、やはり嫌いですし、受け入れられません。他の人から見れば徘徊でも、本人にとっては目的のある行動にすぎません。また「障害(最近はしょう害という表現も)」という言葉も嫌です。夫が受けている「障害年金」「障害者手帳」にも記載がありますが、この人は社会から見ると「害」なんだ～と心が痛くなることがあります。

「介護」という言葉にも引っ掛かりがあります。夫の講演活動の時に、私を、「介護者」と紹介される時がありますが、「なんでやねん！」と叫びたくなります。関西人ではありませんが、この表現がぴったりなのです。介護という言葉は「助けて、守る」という意味だけに聞こえます。ゆきさんが大切にしている本人の「誇りや希望、役割」を尊重しているようには思えないのです。

私は介護しているのではなく、パートナーとして伴走しているのですと、ことあるごとに伝えておりますが。もちろんだからと言ってどんな言葉がふさわしいかというところまでには至っていませんが。

でも、このように様々な疑問を発見し、謎を解く楽しみを持ち、文章で伝え、誰かの心を動かす言葉や文が書けるように、そして、私の嫌いな偽ジャーナリストのようではなく、公正・公平な思考ができるべく大学院の2年間真摯に学んでいきたいと思っております。